芽室町毛根1遺跡採集の石鏃について

A pile of stone arrow heads collected in Kene 1 site, Memuro

大橋　毅※
Takeshi OHASHI

はじめに

本稿で紹介する資料は，芽室町毛根北7線31号に所在する毛根1遺跡（北海道教育委員会・登載番号：L－08－8）において昭和40年代後半に採集され，現在，芽室町教育委員会（以下，町教委）が保管する1,232点の石鏃である。

これらは採集資料であるため，その所属時期や性格等を考えるうえで手掛かりとなる伴出する遺構や遺物など，出土状況に関する詳細な記録に乏しく，資料的な価値という観点からは，ある程度の制約を受けることは免れない。しかし，発見当時の状況を知る方々を対象とする聞取り調査の結果，これら一群の遺物は一括資料として取扱いが可能であると判断するに至った。

そこで，本稿では十勝地域においても石鏃の一括資料としては他に例を見ない数量を誇る本資料に関する観察所見をまとめ，その所属時期や性格について若干の考察を試みてみたい。

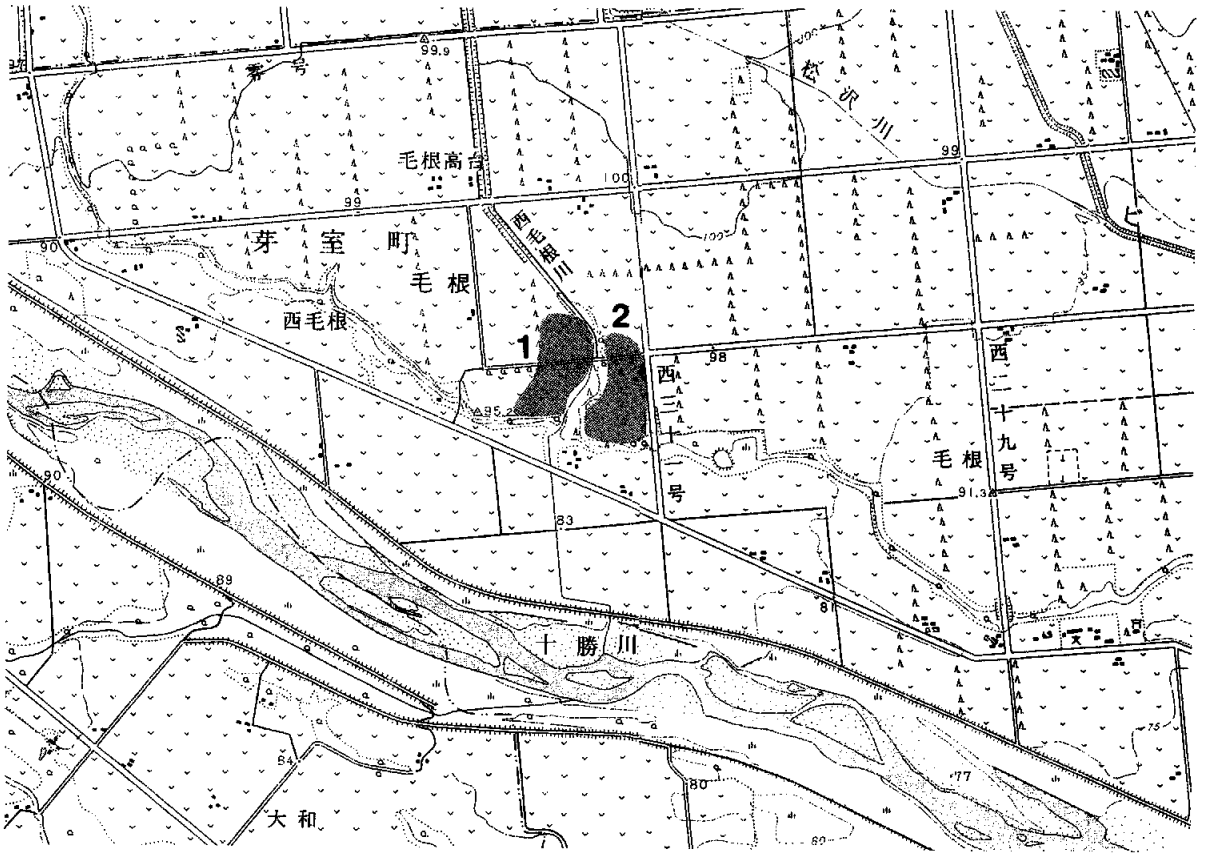

図1　遺跡位置（S＝1：25,000）国土地理院刊行の1/25,000地形図（「帯広」，「御影」）を使用，一部加筆。
1：毛根1遺跡　　2：毛根2遺跡

※ 芽室町教育委員会

1　発見に至る経緯

本稿で紹介する石鏃は，昭和40年代後半に当時小学生だった藤代康子氏が西毛根川右岸の露頭から露出する石片を見つけ，周囲を掘り進めたところ狭い範囲からまとまった状態で出土したものである。なお，出土層位等についての詳細は不明であるが，発見当時の様子について，藤代氏は「黒い土より下の茶色い土」の辺りから石器が出土したと記憶しているという。現在，遺物の発見された露頭面は石積みや崩落防止用のネットなどで覆われているため，土層の堆積状況を確認することは出来ない。

その後，当資料は発見者の通う小学校の教諭の手にわたり，昭和55年に芽室町内の一般分布調査で同遺跡を訪れた北海道教育委員会の調査員の知るところとなり，以後，採取された一群の遺物は，平成17年までビニール袋に入れられたままの状態で，町教委によって保管されていた。

現在，町教委が保管する同遺跡の採取資料の内訳は，石鏃1,232点，両面調整のナイフ状石器1点（図3－18），片刃磨製石斧1点（図4－22），微細剥離痕を持つ剥片12点（図4－19～21），石核1点で，石斧以外は全て石材に黒曜石が用いられている。なお，藤代氏によると，これら一群の遺物は先述した露頭から石鏃とともに出土したもので，遺跡周辺に散布していたものを集めたものではないという。

2　毛根1遺跡の概要と周辺の遺跡

毛根1遺跡は，十勝川北岸の標高約95ｍの河岸段丘を開析する西毛根川右岸に位置する縄文時代の遺跡である。埋蔵文化財包蔵地調査カードの記載によると本遺跡は縄文時代中期～晩期に属するとされ，西毛根川を隔てた東側には同中期とされる毛根2遺跡が位置している（図1）。本遺跡を載せる十勝川北岸の大和面（十勝団体研究会 1978）は，十勝川の現河床面より2段上位に位置する段丘面で，基盤となる上士幌礫層の上位にソフトローム，完新世の降下軽石火山灰であるTa-d降下火山灰，腐植土層が順次堆積するとされる。本資料の採集地点である西毛根川右岸の露頭周辺は，遺跡を載せる段丘面と同川の河床面との間にテラス状の平坦面を持ち，付近には西毛根川に注ぎ込む湧水が存在する。

本遺跡の位置する十勝川北岸の段丘上には，主に縄文時代の遺跡が段丘面を開析する小河川や沢状地形の周辺に，尾根上に張り出した段丘端部にはアイヌ文化期のチャシ跡が確認されている。また，毛根1遺跡を載せる段丘面と同一地形面に対比される十勝川南岸の上札内Ⅱb面上には，縄文時代前期の綱文式土器に伴う9基の墓が出土した小林遺跡（北沢・大橋編 2000）や同晩期の笹島遺跡が標高74ｍ前後の段丘端部付近に分布している。

3　採集資料について

毛根1遺跡において採集された1,232点の石鏃は全て黒曜石製である。以下，本文中で特に触れな

表1　毛根1遺跡採取石鏃の計測値

点数※1	石　材	長さ（cm）		幅（cm）		厚さ（cm）		重量（g）			完形・破損資料の割合(%)※2	
		計測値	平均値	計測値	平均値	計測値	平均値	計測値	総重量	平均値	完形	破損
1,051	黒曜石	1.60－3.55	2.48	0.61－1.24	0.99	0.15－0.90	0.29	0.20－1.10	587.9	0.56	85	15
		基部／長さ（cm）		基部／幅（cm）		基部／厚さ（cm）		側縁角度（°）				
		計測値	平均値	計測値	平均値	計測値	平均値	計測値(右)	計測値(左)	角度差	平均値(右)	平均値(左)
		0.26－1.05	0.69	0.26－0.88	0.50	0.10－0.65	0.20	8－27	8－26	0－9	15	16

※1　総数1,232点のうち完形資料1,051点を対象とする
※2　総数に占める完形／破損資料の割合

い限り，完形資料1,051点を中心にその観察所見についてまとめる。

本資料は全て有茎鏃に分類されるもので，鏃身部側縁の形態と逆刺の作出方法の差違に基づき，細分した（図2）。側縁は石鏃の先端と逆刺を結ぶ線が直線的なⅠ類，外湾するⅡ類，内湾するⅢ類，鏃身部の中～下位にかけての両側縁が平行するⅣ類の4類，逆刺は左右両端を結ぶ線が直線的で，鏃身部と基部の境が明瞭なA類，基部から逆刺に向かって開きながら移行し，鏃身部と基部の境が明瞭なB類，逆刺と基部の区画が不明瞭なC類，逆刺部分に抉りを持ち，鏃身部と基部の境が明瞭なD類，逆刺の作りが左右非対称なE類の5類に細分し，側縁と逆刺の形態の組合せにより個体分類を行った。

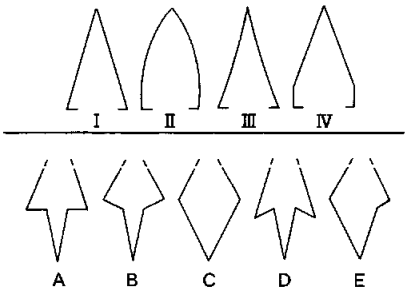

図2　石鏃の分類

これにより，1,051点の完形資料は次の15類型に分類され（図3－1～15），約53%に相当する553点が外湾する側縁を持ち，基部から逆刺に向かって開きながら移行するⅡB類に相当し，以下，ⅡA類（166点），ⅠB類（121点），ⅢB類（73点），ⅡD類（55点），ⅠA類（24点），ⅡE類（11点），ⅢA類（10点），ⅡC，ⅣB類（各9点），ⅠD類（6点），ⅣA類（5点），ⅠE類（4点），ⅣD類（3点），ⅢC類（2点）の順に続き，約7割近くが，側縁が外湾するタイプ（Ⅱ類）で占められる。

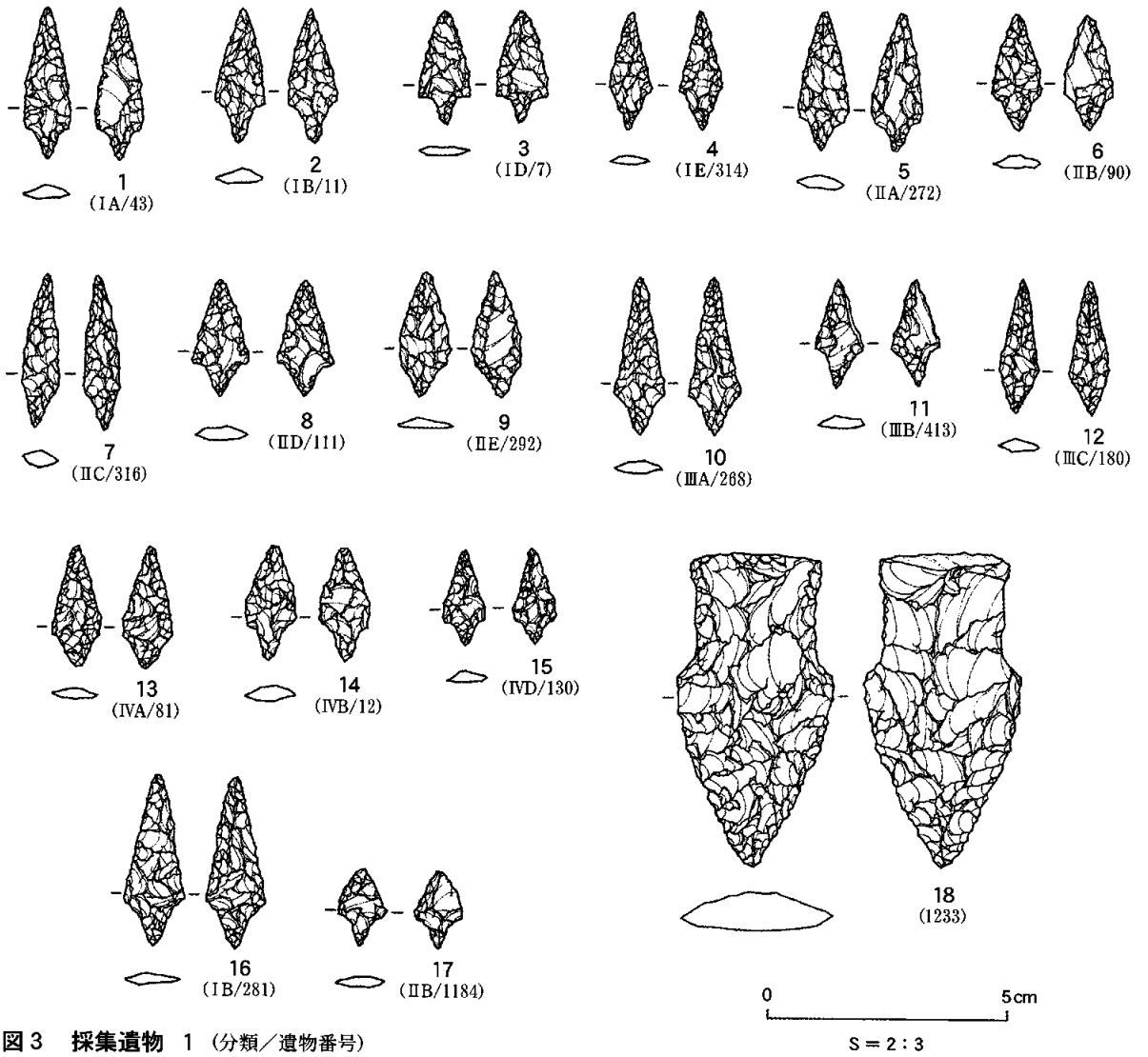

図3　採集遺物　1（分類／遺物番号）

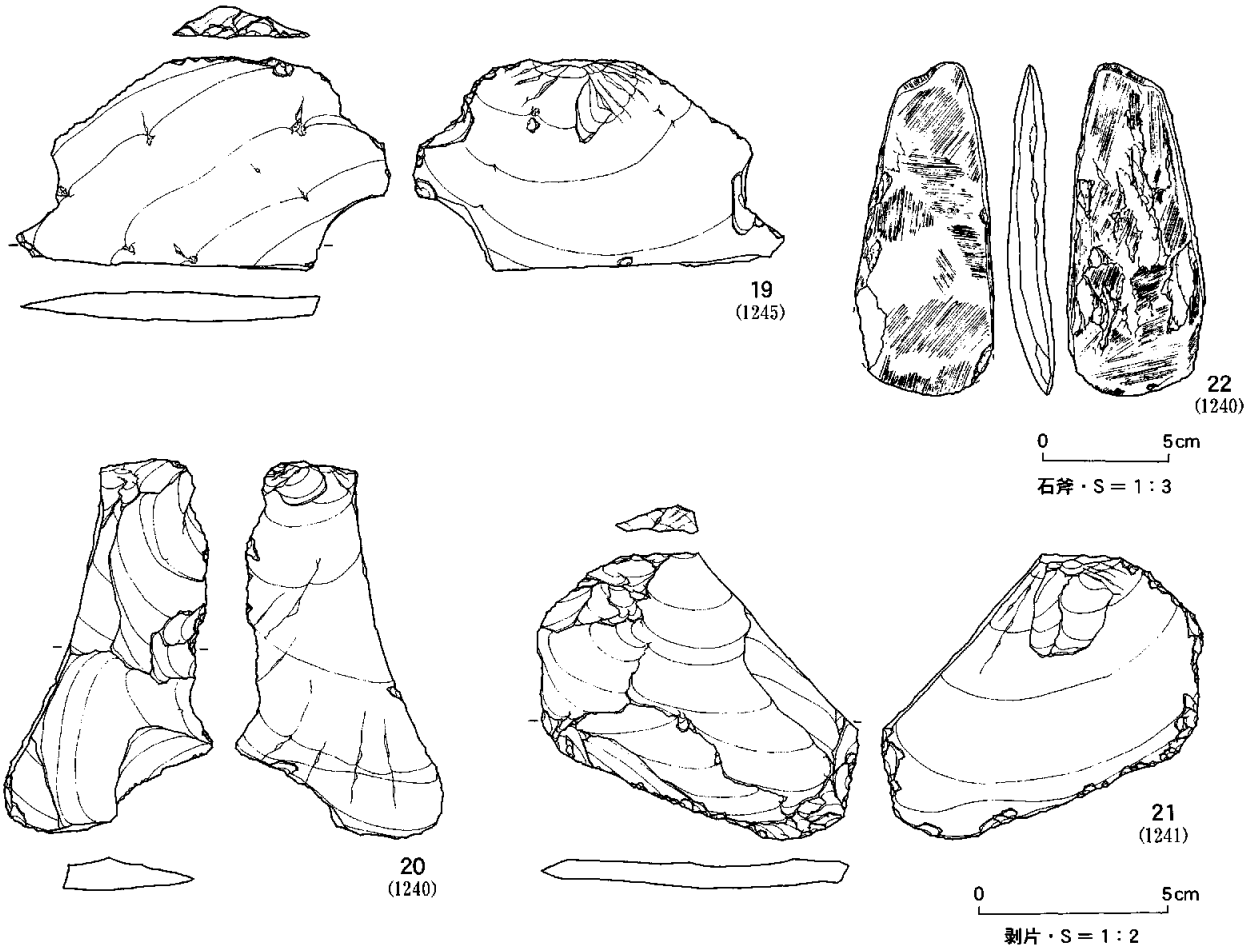

図4　採集遺物 2（遺物番号）

石鏃1,232点のうち，破損資料は全体の約15％に相当する181点で，全体の8割以上が完形資料である。破損部位別の内訳は，鏃身部先端と基部端部のいずれかを欠くものがそれぞれ138点と36点，逆刺部分を欠くもの1点，先端と基部端部の両方を欠くもの5点，先端と側縁の両方を欠くもの1点である。このうち，器体の約1/4～3程度を欠くと推定されるものは3点（遺物番号511，629，721）で，器体の端部を僅かに欠く軽微な破損が大多数を占める。これは先に述べた資料の保管状況に起因するとも考えられ，遺物同士の衝突等が原因で後世に破損が生じた可能性も否定できない。これら石鏃の破損が製作時あるいは使用により生じたものか，または後世に生じたものかという点は，これらの石鏃が実用品として使用されたものか，あるいは副葬品等として用いることを前提に製作されたのかという「実用品，非実用品」という石鏃自体の性格を考えるうえで，重要な意味を持つといえる。

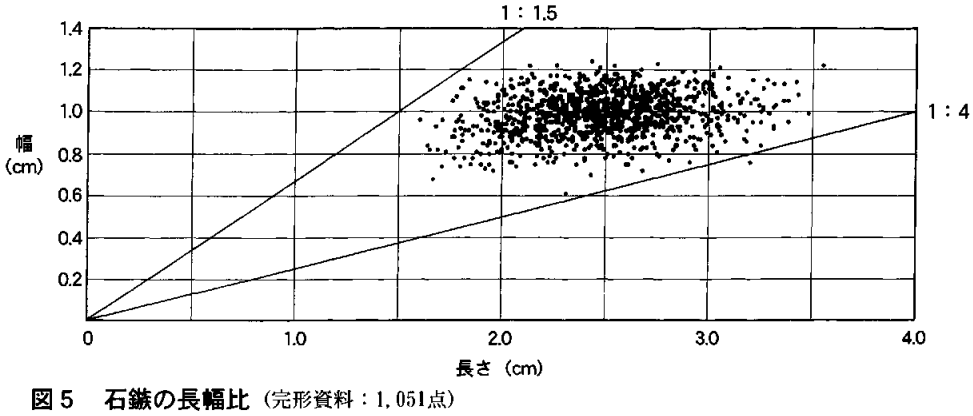

図5　石鏃の長幅比（完形資料：1,051点）

石鏃の素材として用いられた剥片の形態を把握できたものは335点あ

り，縦長の剥片が119点，横長の剥片は216点ある。また，器体の一部に素材剥片の主要剥離面を残すものは343点あり，表面に残すものは49点，裏面に残すものは294点ある。このうちバルブの位置を確認できるものを見ると石鏃の先端部に位置するもの90点，基部側91点，右側縁78点，左側縁70点で，製作時における素材の用い方には目立った特徴を見出すことは出来ない。

器面調整は大まかに3つのタイプにわかれ，両面とも調整が施されるもの（一部に僅かに素材面を残すものを含む）が全体の約69％に相当する724点あり，このほか片面に全面調整が施され，もう一方に器体の長さに対して1/3以上の未調整部分を残すもの210点，表裏面とも周縁部にのみ調整が施されたものが117点見られる。

本資料で認められる特徴の1つとして完形資料中32点に器体の一部に折断面を持つものがある（図3－6，11）。折断面はいずれも鏃身部に位置し，折り取り等により形成された幅の狭い平坦面が石鏃の側縁を形成している。折断面と周辺に残る調整痕との切合いが把握できた資料では，折り取りにより形成された平坦面を打面として器体調整が施されていた。また，折断面を持つ個体の左右両側縁のなす角度の差が0～2°以内に収まるものが25点（78％）あることから，折り取りという行為が石鏃の側縁形成を目的に，素材の準備段階か，あるいは調整の初期段階に行われた可能性がある。

その他，完形資料の2％に相当する21点に被熱の痕跡が肉眼で観察された。その程度はいずれも軽微なもので，表面が著しく発泡するようなものは見られず，表面がわずかに白濁するものが多数を占めている。

石鏃の規模は平均で長さ2.48 cm，幅0.99 cm，厚さ0.29 cm，重量0.56 gである（表1）。完形品のうち，最大，最小のものは，それぞれ長さ3.55 cm（図3－16），1.60 cm（図3－17）となり，石鏃の幅と長さの比率は1：1.5～1：4の間に納まる（図5）。側縁の開き具合を示す器体の中心軸に対する鏃身部先端と逆刺端部のなす角度は左右ともに8－27°の範囲内に納まる。また，1個体中に見られる左右両側縁のなす角度の差は0－9°の範囲内に含まれ，左右で著しく形態が異なるものは見られない。

次に計測部位別の頻度分布を見ると長さは1.90－2.89 cmの間に全体の85％に相当する899点，幅は0.9－1.09 cmの間に68％に相当する717点，厚さでは0.20－0.39 cmの間に94％に相当する992点が集中している。重量は0.50 g－0.69 gの間に全体の55％に相当する583点が含まれる。

以上のことから，幅と厚さについては数量的に比較的まとまりが見られるのに対し，長さと重量に分散する傾向を読み取ることができる。

一方，基部の長さ，幅，厚さについては，その値に見られる変異差は比較的小さく，長さは0.40－0.99 cmの間に全体の99％が含まれ，幅は0.40－0.59 cmの間に全体の約79％，厚さは0.10－0.29 cmの間に全体の98％が含まれている。このように基部の規格差が鏃身部のそれに比べて小さいのは，基部の規格が石鏃を装着する矢柄の規格に規制されるためと考えられる。

4　石鏃の性格，所属時期について

北海道地域において大量の石鏃がまとまって出土する例として縄文時代晩期中葉～続縄文時代前半に見られる「多副葬墓」（瀬川 1983）が存在する。これは単一器種の石器類や玉類等，他を隔絶する大量の遺物を伴う墓で，石鏃や削器，剥片など単一器種が多量に伴う縄文時代晩期の「一品多量」の傾向から，多種にわたる遺物が納められた結果，総数的に大量の副葬品が伴う続縄文時代前半のものへと時間的に変化するとされている（長沼 2000）。その背景として縄文晩期には墓の被葬者と想定される首長が死後に財の格差を持つことを許される存在から，続縄文時代になると生前に個人所有が認められ財の格差を持つ首長へと変化したためとされ，そこに階層性の発生を読み取ろうとする考え

（瀬川 2007）に対し，多副葬墓は死者に対する厚葬が慣例化した結果であり，集団内における個人の果たす役割を表すものにすぎず，首長や階層性の存在に関して否定的な見解も見られる（長沼 2000）。その他に石鏃を「狩猟者のシンボル」と捉え，石鏃など豊富な副葬品を有する土壙墓を「退役狩猟者の墓」とし，社会的男女差や個人的役割など，その背景にある社会的表象を読み取ろうとする考えも見られる（安斎 2008）。

表２は北海道地方において縄文時代晩期～続縄文時代前半に属する単一墓壙から 20 点以上の石鏃が出土した例を集成したものである。これによると縄文時代晩期～続縄文時代初頭で 16 遺跡 40 基，続縄文時代初頭～同前半では９遺跡 26 基を確認した（表中，毛根１遺跡は除く）。このうち，100 点以上の石鏃が出土した例は続縄文時代初頭以降の１基に対し，縄文晩期では 18 基あり，中でも晩期中葉の大洞 C_1～C_2式に属するとされる余市町大川遺跡 GP－480 の 1,095 点は突出した出土数を示し，以下，富良野市無頭川遺跡Ａ地区 Pit 31（331 点），千歳市美々４遺跡Ｐ－32（286 点）など縄文晩期の出土例が続く。１基あたりの墓に伴う石鏃の平均点数を見ると晩期から続縄文初頭に属するもので 139 点となり，続縄文初頭以降の 48 点に対して約 2.9 倍の出土数となる。これは縄文時代晩期の多副葬墓が「一品多量」の傾向を示すのに対し，続縄文時代以降は副葬品を構成する遺物が多種にわたり総数的に多葬となるという長沼の指摘（長沼 2000）が，石鏃における数量の変化として表れた結果と考えられる。また，これらの墓から出土した石鏃のうち完形資料の占める割合は縄文晩期～続縄文初頭で 74%，続縄文初頭以降では 83%といずれも高く，約７割以上は完形品で占められている。

次に伴出遺物の構成をみると各期をとおして石鏃とナイフ・削器類，石斧，剥片類の共伴例が多い一方，縄文晩期の大洞 C_2式期に属する木古内町札苅遺跡（北海道開拓記念館 1976）では石鏃と玉類は同一墓壙内での共伴例がないことから，両者の排他的な関係が指摘されたように，晩期では両者の共伴例は５例にとどまるのに対し，続縄文初頭以降では 12 例と増加し，さらに鉄製品との伴出例が増加する。

縄文時代晩期から続縄文時代の石鏃の形態変遷については，道央部ではⅡ黒層からⅠ黒層の時期に有茎鏃から無茎鏃へと移行することが千歳市ママチ遺跡（種市 1982）や苫小牧市柏原５遺跡（佐藤・宮夫 1997）の報告で指摘されている。酒井は江別市対雁２遺跡を始めとする，道央部の遺跡における所見をまとめ，有茎鏃から無茎鏃への変化は晩期中葉の大洞Ａ式並行段階を画期として移行するとの考えをまとめている（酒井 2004）。道東部では層位的な知見が少なく，僅かに斜里町尾河台地遺跡（金盛 1983）の報告で，縄文晩期において優勢だった有茎鏃の占める割合

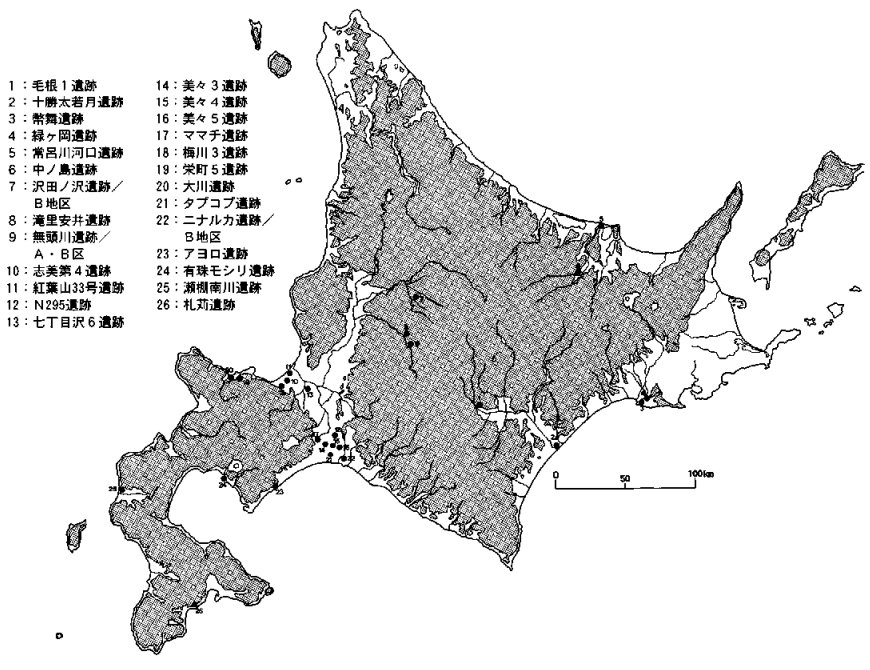

図６　北海道地方における多副葬墓出土遺跡（トーン：標高100m）

表２　多副葬墓に伴う石鏃出土一覧

【縄文時代晩期～続縄文時代初頭／石鏃20点以上】

（単位：点）

番号	支庁名	市町村名	遺跡名	遺構名	所属時期	土器型式	石鏃点数	石鏃の形態 有茎	無茎	脚部整形	木葉形	末製品	その他	不明	石鏃使用石材 Obs	Sha	Aga	Che	その他	石鏃の状態 完形	破損	完形品の割合(%)	石鏃出土位置 埋土部／確認面	覆土／埋土	遺体周辺	埋設部	伴出遺物 上製	石錐・石鋸	ナイフ・削器	掻器	錐器	彫器	石匙	石刀	有孔石製品	磨製石斧	剥片・砕片	敲石・磨石類	礫	石偶	土偶	土製品	竹角製品	貝製品	鉄製品	漆製品	備考	文献
1	十勝	帯広市	稲田町	毛根1	—	—	—	1,232	1,232						1,232					1,015	181	85%	-	—		—	1							1			12								報告資料	本橋
2		浦幌町	上勝太岩月	十場53	縄文晩期末	—	22	22												18	1	82%			○																				切合関係にある上場16出土の2点の有茎尖も本遺跡に伴う可能性あり。	石橋ほか1975
3	釧路	釧路市	鳥取	第58号墓	縄文晩期末～続縄文前半		128	118	10						128					105	23	82%			○			1				1			371								3体合葬墓。「副葬品」に分類されているものを集計。	吉川1991
4			緑ヶ岡	Loc.1	P-4	縄文晩期	晩期	105									105								○		3									30								石器の形態に関する記述なし（石材：金山白色の貫入・石川代より）。	宇田川・澤1981
5	北見	北見市	常呂川河口	ピット23a	縄文晩期？	—	34	34							34					5	29	15%			○			4																ピット23（後北B式期）と切合関係。混入の可能性ある無茎3点は集計から除外。	武田1998
6				ピット211	縄文晩期	晩期	82	82												71	11	87%	○					8						1			1								石鏃：埋土出土の浅鉢内部から出土。	〃
7	十勝	更別村	忠類の沢・B地区	Pit1	縄文晩期～（続縄文？）	—	27		21					3	27					20	7	71%	—	—		—	61	1						1									1			本文で触れられている剥片類は実数不明のため、集計から除外。	斎藤1981
8		〃	〃	Pit19	〃	—	137	5	132						137					134	3	98%			○		20	1						2			1			27					第5群は墓壙の時期を縄文晩期～続縄文を想定。	〃
9		富良野市	無頭川・A区	Pit10	縄文晩期後葉	タンネトウL	29	27						2						21	6	78%	—	—	—	—	32		3								292								「石器の状態」は図示された27点を集計。石器の出土位置不明。	杉浦1998
10		〃	〃・B区	Pit16	〃	〃	10	2	36					2						13	27	33%			○		1						1		2	1	1								石鏃、調査時に新指したもの多。	杉浦1992
11			無頭川・A地	Pit10	〃	〃	93		70	17			6		93										○		162		1	2	1				2		53									杉浦1998
12			〃	Pit16	〃	〃	95	2	93						94	1									○		13	1	21	2	1		1		8		311	8								〃
13			〃	Pit21	〃	〃	188	3	185						188										○		212		2								197									〃
14			〃	Pit25	〃	〃	68	1	67						62	6									○		91						2				14	1								〃
15			〃	Pit28	〃	〃	96	2	93	1					96										○		12						2				3									〃
16			〃	Pit31	〃	—	331	2	315					14	331										○				1	6							20	1								〃
17			〃	Pit94	〃	タンネトウL	283		278					5	278	7								—	—	—	—	9		3	2			1		2		150									〃
18			〃	Pit108	〃	〃	236	2	231						235	1									○		1		11	5			2		2		30	2								〃
19			〃	Pit131	〃	〃	41	2	10					2	41										○		11		1				1				113								本文に「石鏃42点」と記載あるも図示された11点を集計。石器の出土位置不明。	〃
20			〃	Pit146	〃	〃	261	6	248	3	3			1	261								○				865	31	1				5		9		88	1								〃
21	空知	芦別市	滝里安井	P-15	縄文晩期末～続縄文初頭	V群	126	1	117		5	1			126					109	17	87%		○			1		1					3				18	1	9						石鏃：130点出土中、図示された126点を集計。	遠藤編1988
22	石狩	石狩市	志美第4	第24号墓	縄文晩期	大洞C，？	54	54							48	6				37	17	69%	○	○			○							1		2		3				108	7	骨角器：サメ歯。	石橋・清水1979
23			〃	第33号墓	〃	〃	21	21							21					12	12	50%			○			1	209				3						390		2		〃
24			〃	第31号墓	〃	〃	72	65						7	72					11	61	15%	—	—			—							1								1		〃
25		江別市	七丁目B6	土壙墓351	縄文晩期後半	タンネトウL	278	25	250	3					266	12									○		4		4				4		3								石鏃の出土位置不明。	藤原1998
26		〃	〃	土壙墓707	〃	〃	13	7	31	1					13					11	2	85%			○		326		3				2		117		72		1	1			石鏃図示された「副葬品」を集計。埋設遺構は遺構内出土遺物の集計から除外（1号は5層のみ）。	野中2001
27		〃	〃	土壙墓708	〃	大洞C，～A	32	7	25						32					25	7	78%			○		115		1				1		87		22		2				〃	〃
28		〃	〃	土壙墓711	〃	タンネトウL	73	12	58	4				1	72		1			63	10	86%			○		233		148				25		12		338		140		11		〃	〃
29		〃	〃	土壙墓713	〃	〃	125	31	85	5				1	125					108	17	86%			○		356		19				13		6		101		86		3	1	〃	〃
30		〃	〃	土壙墓716	〃	〃	118	3	113	1				1	118					101	11	88%			○		352		2				16		6		50		11		2	1	〃	〃
31		千歳市	美々3	P-127	縄文晩期末葉	大洞A・A'	192	158				34			192					151	41	79%		○														34								石鏃「未製品」は報告書の記載に基づく。	千葉・西田編1992
32			美々4	P-32	縄文晩期	タンネトウL	286	278			5			3	286					207	79	72%	○				212		1				1		8		6		2				石鏃以外は「埋土」出土／凝灰：1黒曜。	道埋文1981
33			美々5	AP-1	縄文晩期末葉	〃	202	190			11			1	202					191	11	95%		○			2		1				2		2								凝灰：1黒曜出土／大洞A式・タンネトウL式伴う住居址、墓壙、ピット各1基を切る。	道埋文1979
34			ママチ	AP-215	縄文晩期後葉	—	123	121	1	1					123									○			7	2	7						2			1					石鏃：1黒曜出土／昭和15年調査・D-23A'・石器集積と分布重複する可能性あり。	石川・佐藤1971、長沼注1987
35			〃	AP-356	〃	〃	22		21		1				22					16	3	84%		○					1					7			18	1							石鏃：1黒曜出土	長沼注1987
36			〃	AP-363	〃	〃	188	17	122		10				189									○			1	1									168	2							「副葬品」昭和15年調査遺物を集計／1黒曜出土／昭和15年調査・第9号墓の可能性あり。	石川・佐藤1971、長沼注1987
37			〃	AP-385	〃	〃	20	9		1			7	2	18					0	20	0%			○												2								石鏃：接合後の個体数による。	長沼注1987
38			柏川3	IP-5	縄文晩期	—	75		75						75					72	3	96%	—	—	—	—	7																	石鏃の出土位置についての記述なし。	大谷・川村編1988
39	後志	余市町	栄町5	P-2	縄文晩期	大洞A	49	1	16					2	49					31	18	63%		○			295		5	2		1		1		30				13				出土遺物集計／U フレイクは剥片に含めて集計。	長沼1990
40			大川	GP-180	縄文晩期中葉	大洞C～C，1	1,065																		○		3											2			1				三体合葬／掲載石器、記載石器数に基づいて集計／発掘石器はスタレイバーに分帰。	佐2000
41		木古内町	札苅	11号土壙墓	縄文晩期	大洞C，1	53	53												17	6	39%	○				82		2				1				27								上部構造調査・上部構造中出土遺物を集計／石鏃石材内訳不明。	北海道開拓記念館1976

【続縄文初頭～続縄文前半／石鏃20点以上】

（単位：点）

番号	支庁名	市町村名	遺跡名	遺構名	所属時期	土器型式	石鏃点数	石鏃の形態 有茎	無茎	脚部整形	木葉形	末製品	その他	不明	石鏃使用石材 Obs	Sha	Aga	Che	その他	石鏃の状態 完形	破損	完形品の割合(%)	石鏃出土位置 埋土部／確認面	覆土／埋土	遺体周辺	埋設部	伴出遺物 上製	石錐	ナイフ・削器	掻器	錐器	彫器	石匙	石刀	有孔石製品	磨製石斧	剥片・砕片	敲石・磨石類	礫	石偶	土偶	土製品	竹角製品	貝製品	鉄製品	漆製品	備考	文献
6	北見	北見市	中ノ島	1号墳墓	続縄文初頭		13		13						33	4	91%								○		9	6	11				3				15		3	2		1						久保1978
11	石狩		紅葉山33号	第1号小竪穴	続縄文	恵山	60	7	51					2	60					57	3	95%			○		3		13				1						5				1				石鏃：62点出土中、図示、集計表に掲載された60点を集計。	木村1975
			〃	第9号小竪穴	続縄文？	--	29	3	26						29					28	1				○		1		2				1				2				21					〃
			紅葉山33号	GP-46	続縄文	恵山	17	21	22					4	30	8		5		29	1	94%			○		3		30		1		0		1	6	13	66		3		1				1	不定形石器＝ナイフ・削器／U フレイク＝剥片で集計。掲り号各1点出土。	石橋・清水1981
			〃	GP-22	〃	〃	63	23	10						51	11			1	58	5	92%			○		6		15		2		5		1	2	28		2		1	1				〃
			〃	GP-3	〃	〃	72	25	17						19	15		8		63	9	88%			○		1		10				2				28				1		1			〃
			〃	GP-1	〃	〃	81	16	64					1	77	2		1		70	10	86%			○		4		14		1	1	8		3	2	205				5			1		〃
			〃	GP-54	〃	〃	56	14	12						26	9		1	7	10	16	71%			○		1		2				2			1	2								本文中に石鏃59点出土とあるが図示された30点を集計。	〃
			〃	GP-11	〃	〃	97	32	65						86	6		5		86	11	89%	○				1		27		1		1			3	1	33		2						〃
12		札幌市		N225	第1号ピット	続縄文	プレ恵比	108	1	107						105	3				91	17	81%		○			2		4				2				1									札幌市教委1987
			〃	第13号ピット	〃	恵山	27	13	11						21	3				21	3	88%	○	○			2		2				7				1								南川雪郎指定＝アヨロ2b 類相当	〃
20		余市町	大川	GP-125	続縄文	恵山	30	30							30					29	1	97%		○	○		○		1		7				1				2		1						ケマ型土製品	佐2000
			〃	GP-163	〃	〃	22	9	13						21				1	22		100%		○			9		8		1		4							1					玉製：石孔石製品1点	〃
			〃	GP-179	〃	〃	33	5	28						33					33		100%			○		1		1		2		3		2							1		図示された石鏃を集計。	〃
			〃	GP-200	〃	〃	61	1	53						63				1	56	8	88%			○		1		1				5							1					遺物計測表から算出。	〃
			〃	GP-243	〃	〃	30	1	28						30					21	6	80%	○		○		1		3		1										5					〃
			〃	GP-359	〃	恵山	56	28	28						56					16	10	83%		○	○		2		5				1		3	2				2				1?		〃
			〃	GP-590	〃	〃	70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1		3																出土石器数本文に記載あり、内訳等詳細不明。	〃
21	胆振	苫小牧市	タプコプ	30号墳墓	続縄文前半	恵山	22	11	5	1				2	8	11				18	4	82%	○				1		9	2			3		7		1		1					2	環器1類b＝アヨロ1群1類a相当。一覧表掲載石器を集計。	佐藤・宮夫1981
22			ニナルカ・B地区	1号墓	続縄文	〃	65	21	13						11	10	2			10	25	82%			○		2		10		3		1				1				261					佐藤・宮夫1983
				3号墓	〃	〃	25	13	7		5				7	18				15	10	80%			○		3	2	11		3				2								1	3体合葬墓・掲載品は飾り1点。	〃
23		白老町	アヨロ	墓25	続縄文前半	恵山	32	32							29	1	2			31	1	97%			○		6	3	11				2		1									アヨロII群2類b。伴出遺物は、実測図、一覧表に掲載されたものを集計。	高橋編1980
24		伊達市	有珠モシリ	4号墓	続縄文前半	恵山	23	23							5	17	1			17	6	74%	○				3	1			1			1			1			37		59	6				改葬墓・成人男性／貝製品には貝殻3点含む。	大島2003
				7号墓	〃	〃	36	1	31					1	1	32				29	7	81%	○				1	7	6		1		2				17				17		10	1				改葬墓・2体合葬／貝製品には貝殻1点含む。	〃
25	檜山	せたな町	南川	第12号墓壙	続縄文前半	恵山	30	30							9	20	3			9	21	30%			○				11		1				2	1	52									南川IV群	高橋ほか1976
			〃	第18号墓壙	〃	〃	36	31	2						12	22	2			30	6	83%			○			3	8		5		7		1	2	10		6							南川IV群	〃

石材：Obs（黒曜石）、Sha（頁岩）、Aga（メノウ）、Che（チャート）

が，続縄文初頭以降減少することが指摘されている。また，表２による墓壙からの出土例によると道東部（十勝，釧路，北見地方）では縄文時代晩期～続縄文初頭に位置付けられる浦幌町十勝太若月遺跡，釧路市幣舞遺跡，緑ヶ岡遺跡，北見市常呂川河口遺跡では有茎鏃が優勢なのに対し，続縄文初頭～前半に属する北見市中ノ島遺跡の１号墳墓や無茎鏃10点が出土した池田町池田３遺跡のＰ３土壙墓（表２未掲載／横山 1993）では，一転して無茎鏃が優勢となる。

これら数少ない事例からではあるが，道東部では大略的にみると道央部に比べ，やや遅れて続縄文時代初頭を画期として有茎鏃から無茎鏃へと石鏃の形態が移行していった可能性がある。

以上の点から，本稿で紹介した毛根１遺跡の有茎石鏃を主体とする一群の採集遺物は，発見者からの聞き取り調査で確認された事実関係に間違いがないとの前提に立つならば，1,000点を超える石鏃の出土数や８割以上を占める完形資料，全点が有茎鏃という形態的な共通性，石斧や剥片類など共伴したとされる遺物構成などから，縄文時代晩期～続縄文時代初頭の間に位置付けられる，いわゆる多副葬墓に伴う遺物である可能性が高いと考えられる。また，他の遺跡の事例を参考にすると本遺跡周辺には，他にも同時期に属する墓壙が存在する可能性がある。

おわりに

以上，本稿では毛根１遺跡の石鏃の採集資料を題材にその所属時期や性格について言及してきたが筆者の知見の不充分さから，東神楽町沢田の沢遺跡や富良野市無頭川遺跡の事例から指摘されている多副葬墓から出土する石鏃の実用，非実用という性格に関する問題（斎藤 1981，杉浦 1996）を踏まえたうえでの十分な検討を行うことができなかった。この点については，他遺跡の出土資料を含め，個々の石鏃に施された調整加工の在り方や顕微鏡下での使用痕の観察，計測等による石鏃の規格などの比較検討をとおして明らかにされるものと考えている。これらについては今後の検討課題としたい。

最後に，本資料を公表する許可を頂いた芽室町教育委員会，本稿を作成する機会を頂いた帯広百年記念館の山原敏朗，北沢　実両氏，遺物の発見当時の状況についてご教示頂いた藤代康子，勝子両氏，遺物の注記，計測を担当した冨地ひとみ氏，資料の写真撮影，現像，焼付けにご協力頂いた佐藤雅彦氏をはじめ，多くの方々に指導，助言を頂いた。末筆ながらここに記して感謝の意を表します。石川　朗，大鳥居仁，大鳥居千鶴，大矢義明，倉橋直孝，越田賢一郎，笹島香織，田才雅彦，西脇対名夫（敬称略，五十音順）

参考・引用文献

青野友哉（1999）「大洞～恵山式土器の墓と副葬品－研究成果と今後の課題－」『シンポジウム海峡と北の考古学－文化の接点を探る－』資料集Ⅱ　p.43-76　日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会
阿部朝衛（1998）「副葬品としての石鏃－北海道木古内町札苅遺跡の石鏃を例として－」『北方の考古学－野村崇先生還暦記念論集－』野村崇先生還暦記念論集　p.263-276
安斎正人（2008）「石鏃を副葬した人々」『異貌』第26号　p.16-30　共同体研究会
石川　朗（1994）『釧路市幣舞遺跡調査報告書』Ⅱ　北海道釧路市埋蔵文化財調査センター
――――（1996）「Ⅵ．結語」『釧路市幣舞遺跡調査報告書』Ⅲ　北海道釧路市埋蔵文化財調査センター
――――（1999）『釧路市幣舞遺跡調査報告書』Ⅳ　北海道釧路市埋蔵文化財調査センター
石川　徹・佐藤一夫（1971）『ママチ遺跡』北海道千歳考古学研究会・北海道千歳市教育委員会
石橋孝夫・清水雅男ほか（1979）『SHIBISHIUSU－花畔砂提列における縄文時代晩期の住居址・竪穴群・墓地の発掘

記録－』Ⅱ　北海道石狩町教育委員会
石橋孝夫・清水雅男（1984）『紅葉山33号遺跡－紅葉山砂丘における続縄文時代前半の墓地発掘の記録－』北海道石狩町教育委員会
石橋次雄ほか（1975）『十勝太若月－第三次発掘調査－』浦幌町教育委員会
稲垣和幸（1998）『七丁目沢6遺跡』（5）　北海道江別市教育委員会
乾　芳宏編（2000）『大川遺跡における考古学的調査　余市川改修工事に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書（墓壙篇1）』Ⅱ　北海道余市町教育委員会
宇田川洋・澤　四郎（1984）「釧路市緑ヶ岡遺跡の墓壙（1963年度）」『河野広道博士没後20年記念論文集』p.253-276
内山真澄（1998）「続縄文期における石鏃の変化」『時の絆　道を辿る－石附喜三男先生を偲ぶ』p.167-179
遠藤香澄編（1998）「Ⅳ　芦別滝里安井遺跡の調査」『滝里遺跡群』Ⅷ　北埋調報第123集
大島直行（2003）「Ⅲ．有珠モシリ遺跡の概要」『図録　有珠モシリ遺跡』p.37-58　伊達市教育委員会
大谷敏三・田村俊之編（1986）『千歳市文化財調査報告書ⅩⅡ　梅川3遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会
金盛典夫（1983）『尾河台地遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告Ⅱ
北沢　実・大橋　毅編（2000）『芽室町小林遺跡－第5次発掘調査報告書－』芽室町教育委員会
木村英明（1975）『続縄文時代の墓壙群の研究【資料編】－石狩町紅葉山33号遺跡の例－』紅葉山33号遺跡調査団・石狩町教育委員会
久保勝範（1978）『北見市中ノ島遺跡発掘調査報告書』北海道北見市
斎藤　傑（1981）『東神楽町沢田の沢遺跡発掘調査報告－旭川空港拡張整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査－』フィルドの会
酒井秀治（2004）「北海道道央部における縄文晩期後葉から続縄文前葉の石鏃について－江別市対雁2遺跡の調査から」『北方島文化研究』第2号　p.27-36
佐藤一夫・宮夫靖夫編（1984）『タプコプー北海道苫小牧市植苗地区国道36号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター
――――――――（1985）「ニナルカ遺跡」『ニナルカ』苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター
――――――――（1997）『柏原5遺跡－一般国道235号日高自動車道苫東道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター
札幌市教育委員会（1987）『N295遺跡』札幌市文化財調査報告ⅩⅩⅩⅡ
杉浦重信（1988）『無頭川遺跡』富良野市教育委員会
――――（1992）『無頭川遺跡』Ⅱ　富良野市教育委員会
――――（1996）『無頭川遺跡』Ⅲ　富良野市教育委員会
瀬川拓郎（1983）「縄文後期～続縄文期墓制論ノート」『北海道考古学』第19輯
――――（2007）「縄文－続縄文移行期の葬制変化」『縄文時代の考古学9　死と弔い－葬制－』同成社　p.208-218
高橋和樹・内山真澄・土田亜佐子編（1976）『瀬棚南川遺跡』南川遺跡調査団
高橋正勝編（1980）「アヨロ－恵山文化の墓－」北海道先史学協会
武田　修（1996）『常呂川河口遺跡』（1）　北海道常呂町教育委員会
種市幸生編（1982）『ママチ遺跡』北埋調報第9集
千葉英一・西田　茂編（1992）「Ⅱ　美々3遺跡　第Ⅱ黒色土層の調査（平成3年度）」『美沢川流域の遺跡群』XV　北埋調報第77集
十勝団体研究会編（1978）『専報22号　十勝平野』十勝団体研究会
㈶北海道埋蔵文化財センター（1984）「Ⅲ　美々4遺跡の調査」『美沢川流域の遺跡』Ⅶ　北埋調報第14集
長沼　孝編（1987）『千歳市　ママチ遺跡』Ⅲ　北埋調報第36集
長沼　孝（1990）『余市町　栄町5遺跡』北埋調報第66集
――――（2000）「狩猟採集民の副葬行為　続縄文文化」『季刊考古学』第70号
野中一宏（2004）『七丁目沢6遺跡』（10）北海道江別市教育委員会
埴原和郎・岡村道雄（1981）「墓に副葬された石鏃に関する統計学的検討」『人類学雑誌』第89巻2号　p.137-144
北海道開拓記念館（1976）『札苅－北海道上磯郡木古内町における縄文時代晩期土壙墓の調査－』
北海道教育委員会（1979）「Ⅳ　美々5遺跡」『美沢川流域の遺跡群－新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』Ⅲ
横山英介（1993）『池田3遺跡』北海道池田町教育委員会

写真１　採集石器（S＝１：２）

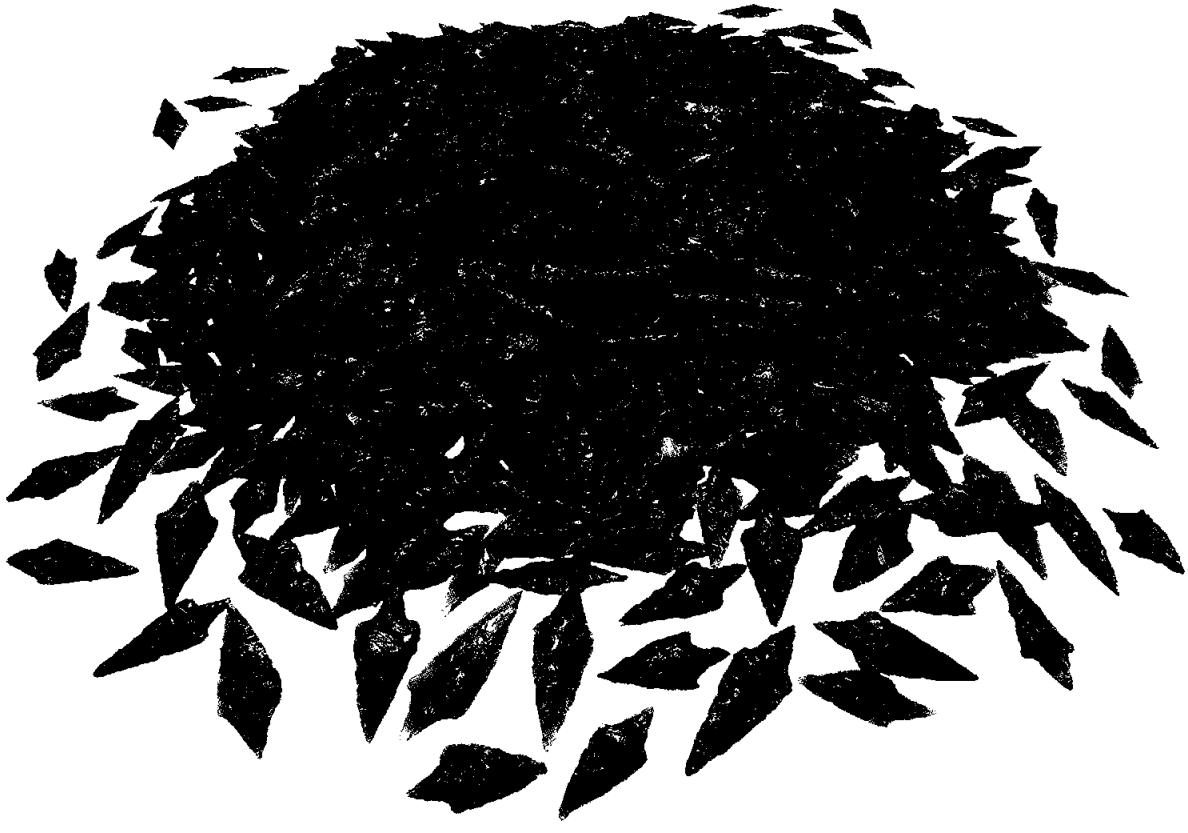

写真２　採集石鏃（1,232点）